

温泉観光実践士養成講座の意義

The significance of organizing the course of 'Practical Certificate of Onsen Tourism'

浦 達 雄*

URA Tatsuo

The extension lecture of 'Practical Certificate of Onsen (Hot Spring) Tourism' is organized by Osaka University of Tourism Institute of Tourism Studies (ITS) as a joint operation, with theme of 'The right understanding of hot spring and revitalization of hot spring resort'. The aim of this course is practical training to qualify this certificate. The holders of this certificate are expected to visiting hot spring resorts, and trying to the activation of Japanese traditional inn, hot spring facilities and region which has hot spring source. This extension lecture focuses for not only for regional contribution by university but also for introducing latest research results for trainees.

キーワード：温泉観光 (Onsen Tourism), 講座 (Course), 意義 (Significance), 地域貢献 (Regional Contribution), 資格 (Certificate)

1. はじめに

(1) 研究の背景

昨今、温泉関係の講座が数多く開講され、温泉や温泉地の活性化に関して一役買っていると考えられる。従来、講座と言えば、新聞社主催のカルチャー講座、公民館講座、大学主催の講座など数々の講座があって、講座ブームを支えたが、今日では、地方公共団体においては文化関連の予算の削減があって、その数はピーク時に対して、半数にも達していない。

こうした中で、温泉に関する講座は、民間を主体として着実に定着している。その代表は、温泉ソムリエの講座で、受講生に対しては、温泉ソムリエの称号が与えられ、人気の講座となっている。

今回、取り上げる温泉観光実践士養成講座は、2011年7月11日・12日の両日で第1回を開催した。2013年は5回目、6月29日・30日に開催した。現在、わが国を取り巻く温泉地の実情は実に厳しい。地熱発電の

問題、温泉資源の枯渇、温泉旅館の経営不振などもあって、温泉先進国・日本に相応しくない状況を呈している。

こうした中で、温泉観光実践士養成講座は、「温泉の正しい理解と温泉地の活性化」をテーマに、持続可能な温泉地のあり方を模索するために企画した講座である。

講座を通して、受講生に対して「温泉観光実践士」という認定証を発行し、自信を持って、「温泉の正しい理解と温泉地の活性化」に役立つ人材として、意欲的な活動を願うものである。

開催要項（第5回・2013年開催）の一部は、資料に示す通りである。受講料は1科目500円、9科目受講で4,000円とリーズナブルである。講座の資料代（テキスト）は1,000円で販売している。

(2) 研究の目的と方法

研究の目的は、温泉観光実践士養成講座を対象として、その実態と意義を明確にするものである。特に、講座誕生の背景、講座の実態、受講生の実態などを主体的

*大阪観光大学観光学部

に取り上げた。研究の方法は、講座の開催要項や科目の分析、修了レポートの分析、講師や受講生に対する聞き取り調査などである。

(3) 従来の研究成果

温泉関係の講座に関する従来の研究成果は、観光地理学の分野では見当たらない。ただし、関連分野では、別府八湯温泉道の意義に関する研究（浦 2008）、別府八湯検定試験の意義に関する研究（浦 2011）などがある。

2. 温泉観光実践士養成講座の開催趣旨と講座の内容

(1) 温泉観光実践士養成講座の開催趣旨

温泉観光実践士養成講座は、大阪観光学研究大学の共催で、主催は同所の所属研究員を主体とした温泉観光実践士養成講座実行委員会となる。実行委員会の委員長は観光学研究所・所長が務めている。

日本を代表する観光資源である温泉資源が有効に利用され、正しく活用されることで、いままで以上に温泉と温泉地が広く国民に愛され、さらには **ONSEN** として外国人にも親しく利用されることを願ってやまない。しかし、21世紀に入って、温泉偽装、ガス爆発、レジオネラ症、震災、雪崩による事故などが発生し、温泉に対する社会的な不信・不安が生じた事実は周知の通りである。一方、バブル経済の崩壊で、全国の温泉観光地では団体旅行の激減などで、観光客数が減少し、温泉旅館の経営不振が顕在化してきた。

そこで、観光学研究所では、温泉の正しい理解、温泉地の活性化に関する人材の育成を意図して、2009年7月に第1回「温泉観光実践士」養成講座を開講したのである。講座の内容は、主に実践面を重視した講座を意図しており、「温泉分析書の見方・読み方」「温泉旅館の経営」「温泉地の活性化」「関西の温泉地」などの科目を取り入れた。

その後、第2回（2010年6月26日・27日実施）、第3回（2011年6月25日・26日実施）、第4回（2012年6月23日・24日実施）に引き続き、第5回（6月29日・30日）を開催したのである。

講師は、観光学研究所の研究員及び客員研究員で、温泉及び温泉地に関する大阪を代表する専門家となる。実践面を重視した平易な講義によって、温泉を正しく理解した上で、温泉観光地の振興・活性化に寄与する人材を育成する考えである。全講義受講生に対して、観光学研究所所定の「温泉観光実践士」、3回の受講生に対して

「温泉観光管理士」、5回の受講生に対して「温泉観光診断士」の認定証を発行し、受講生のモチベーションを高めることにした。

なお、温泉施設の管理、科学的な分野については、(財)中央温泉研究所・(社)日本温泉協会・温泉工学会・日本温泉管理士会共催の温泉経営管理研修会、学会レベルの講座の場合は日本温泉地域学会開催の温泉観光士の講座を紹介している。

ところで、大学は高等教育機関である。しかし、近年では、地域連携や社会貢献の大切さが求められるようになった。つまり、日頃の研究や教育の成果を地域や社会に還元することは大学の新たな使命となってきた。そこで、最新の研究成果をもとにした大学における温泉講座開講の意義は深いと思われる。

(2) 講座の内容

①第1回（2009年）講座の内容

表1は、第1回目から第5回目までの講座科目一覧である。「温泉の正しい理解と温泉地の活性化」を全体的なテーマとし、人文・社会科学系の科目と自然科学系の科目を取り入れた。つまり、前者では「温泉地の歴史」「温泉地と文学」「温泉地の活性化」「温泉旅館の経営」「関西の温泉地」、後者では「温泉と健康」「温泉の定義と分類」「温泉の成分と泉質・効果」「温泉分析書の見方・読み方」である。温泉工学や温泉入浴に関する科目が欠如しているが、限られた時間、講師の専門にかんがみ、足りない部分は、他の講座を受講することで、カバーしてもらうことを提案している。本講座の特色は、自然・人文・社会科学に関する科目がミックスされており、それなりの筋道が通っていることであろう。「温泉地と文学」「温泉旅館の経営」「温泉地の活性化」は他の講座では見当たらない。本講座の懐の深い部分だと思われる。「関西の温泉地」も大阪開催ならではの科目と言えよう。

②第2回（2010年）・第3回（2011年）・第4回（2013年）の講座内容

第2回（2010年）・第3回（2011年）・第4回（2013年）の講座内容は回を重ねることで、スタッフの充実、講座の深化が図られた。担当者は一部交代したが、講座の科目名に変更はない。

③第5回（2013年）年の講座内容

第5回は、2013年6月29日・30日に開催した。第5回目は講座スタッフの充実が行われ、担当者・担当科目の一部変更を行った。担当者の変更は「温泉地の歴

表 1 温泉観光実践士養成講座の講義科目一覧

第 1 回・第 2 回・科目の一覧 (2009 年・2010 年)			第 4 回・科目の一覧 (2012 年)		
	科目	講師		科目	講師
第 1 日目	①温泉地の歴史 ②温泉地と文学 ③温泉の定義と分類 ④温泉の成分と効果 ⑤温泉分析書の見方・読み方	浦 達雄 安達清治 高垣 聡 高垣 聡 高垣 聡	第 1 日目	①温泉地の活性化 ②温泉旅館の経営 ③温泉の定義と分類 ④温泉の成分と効果 ⑤温泉分析書の見方・読み方	浦 達雄 浦 達雄 高垣 聡 高垣 聡 高垣 聡
第 2 日目	⑥温泉旅館の経営 ⑦温泉地の活性化 ⑧温泉と健康 ⑨関西の温泉地	浦 達雄 浦 達雄 中尾 清 中尾 清	第 2 日目	⑥温泉地の歴史 ⑦温泉地と文学 ⑧温泉と健康 ⑨関西の温泉地	小堀貴亮 山路茂則 中尾 清 中尾 清
第 3 回・科目の一覧 (2011 年)			第 5 回・科目の一覧 (2013 年)		
	科目	講師		科目	講師
第 1 日目	①温泉地の歴史 ②温泉地と文学 ③温泉の定義と分類 ④温泉の成分と効果 ⑤温泉分析書の見方・読み方	小堀貴亮 安達清治 高垣 聡 高垣 聡 高垣 聡	第 1 日目	①温泉地の歴史 ②温泉地と文学 ③温泉の定義と分類 ④温泉の成分と効果 ⑤温泉分析書の見方・読み方	内田 彩 山路茂則 高垣 聡 高垣 聡 高垣 聡
第 2 日目	⑥温泉旅館の経営 ⑦温泉地の活性化 ⑧温泉と健康 ⑨関西の温泉地	浦 達雄 浦 達雄 中尾 清 中尾 清	第 2 日目	⑥温泉旅館の経営 ⑦温泉地の活性化 ⑧温泉地と旅行企画 ⑨関西の温泉地	浦 達雄 小堀貴亮 崎本武志 中尾 清

史」「温泉地の活性化」で、科目の変更は「温泉と健康」を「温泉地と旅行企画」とした。自然系 3 科目を残して、それぞれの専門家が一番近い科目を持つことになった。

したがって、本講座の特色は、人文・社会系科目の充実で、これを自然系 3 科目で支えることになった。

特に「温泉地と旅行企画」は他の講座では見られない科目で、「温泉地と文学」「温泉旅館の経営」とともに、看板の科目と言えよう。

なお、講座は 6 月末の土曜日・日曜日で開講している。土曜日は講義終了後、近くの犬鳴山温泉の温泉旅館である「み奈美亭」で宿泊懇親会を開催している。原則、講師全員が懇親会に出席し、意見の交換、講義の補習を行なっている。懇親会参加者も増えており、席上、温泉をキーワードとした異業種交流が行われている。

3. 受講生の実態

(1) 受講生の構成

表 2 は、受講生の地域構成を示したものである。第 1 回目は、観光学研究所の研究員、大阪観光大学の学生、別府八湯温泉道の名人などに声をかけた。主に HP での告知やメールでの連絡である。その結果、43 人の受

表 2 受講生の地域構成 (2009-2013 年)

番号	都道府県	2009	2010	2011	2012	2013	合計
4	宮城				1		1
6	山形	1					1
11	埼玉	2	1	2		2	7
12	千葉	1		1		1	3
13	東京		1	3	2	4	10
14	神奈川		1	2	2	1	6
15	新潟	1					1
16	富山					1	1
17	石川		1				1
20	長野					2	2
21	岐阜				1	1	2
22	静岡					1	1
23	愛知	2	2	2		5	11
25	滋賀					2	2
26	京都		1	1	1	3	6
27	大阪	22	20	30	28	24	124
28	兵庫	6	2	7	8	9	32
29	奈良		1	2		3	6
30	和歌山	2	3	2	4	4	15
32	島根		1				1
34	広島			1	1	1	3
40	福岡	3		2		4	9
41	佐賀	1				1	2
44	大分	2					2
46	鹿児島			1			1
	合計	43	34	56	48	69	250

講生が誕生した。以下、第2回・34人、第3回・56人、第4回・48人と続き、第5回・69人は過去最高となった。この種の講座は、一部の講座を除いて、第1回を開催後、停滞が続き、その後、消滅している。本講座は、節目の第3回・56人、第5回・69人と50人超えを果たし、特に第5回・69人は、当日の朝まで70人受講の予定であった。

受講生の構成を地域別で見ると、大阪開催なので、地元大阪府を中心に近畿地方の受講生が多い。しかし、北は東北・関東、南は九州からの受講生も存在し、分布の範囲はほぼ全国に展開している。

(2) 受講生の属性

受講生の属性だが、観光学研究所客員研究員、別府八湯温泉道の名人関係者、大阪観光大学界隈の住民、学生が主体だったが、講座の知名度が拡大するにつれて、温泉ソムリエのメンバーが徐々に増えている。第5回の講座では、69人の受講生中、25人程度が温泉ソムリエのメンバーとなった。大阪観光大学の学生では留学生の受講が目立つ。これはゼミの指導教官が積極的に受講を進めた結果だが、これに応えた留学生も素晴らしいと言えよう。

第1回講座では、別府八湯温泉道名人の関係者が九州から5人受講し、その結果、温泉観光実践士九州支部会を結成し、独自の活動を行なっている。

なお、受講生の受講回数は、5回連続が1人、4回目が2人、3回目が8人、2回目が4人である。家族や夫婦での受講生も増えている。

4. 受講生アンケートの分析

温泉観光実践士養成講座では、最後にレポート課題の提出を求めている。その中には、温泉や温泉地の活性化に対して、貴重な意見も多い。ここでは第5回の講座のレポートを主体にして、分析を試みたい。

(1) 受講の動機と情報源

基本は温泉が好きで、関連として趣味や仕事に結びつき、知識の向上を目指す方が多い。温泉ソムリエでは、資格講座の受講を進めており、その一貫として受講する方も目立った。中には、温泉地の活性化に役立つための知識の吸収、温泉好きでガイドブックにない温泉知識の吸収を求める方も散見される。

情報源は、温泉ソムリエ仲間のフェイスブックやプロ

グ、おふる学校、HP、友人・知人の紹介などがある。

(2) 温泉旅館・温泉施設・温泉地の活性化に関する意見

以下、具体的な意見を例示するが、紙面に限りがあり、その一部を紹介する。

①温泉の良さを生かすために、その周辺の協力が必要
自然環境と結びつける。食と温泉を生かす。近代的な湯治場を目指す。

②健康志向に便乗する

マラソン大会、ウォーキング、登山+温泉企画

③日本人は温泉のことを意外と知らない

温泉資源を守りながら、一人ひとりが温泉を知ることが大切。マスコミは興味本位の温泉紹介を自重し、義務教育において、温泉の大切さを取り上げるべきである。

④温泉地と顧客のギャップ

温泉地側は、顧客の健康や癒し志向、長期滞在できない社会事情に対応すべきで、顧客の意見や希望などを温泉地の活性化に取り込むべきである。

⑤コラボの展開

クアオルトの構想に期待している。温泉×環境、温泉×健康、温泉×食というようにコラボを行うべきである。

⑥大切な地域性

山の温泉では、マグロの刺身は不要。地域の食材や伝統・文化を生かすべきである。

⑦各種プランの充実

温泉について、経営者はさらに勉強すべし。宿泊やスタンプラリーなど各種プランの充実を図る。

⑧温泉情報の公開

温泉の状態、かけ流し、塩素消毒などの掲示を徹底する。旅館の内湯をスタンプラリーで公開する。

⑨熱海の活性化

共同湯の情報開示（入浴情報）。花や景色など徒歩で巡れる場所を作る。パワースポットでの縁結びの強化。坂が多いので、ゆっくりと歩けるウォーキングコースの設定。リピータ対策（宿泊スタンプラリーの実施。特典明示）。

⑩クアオルト

由布院などクアオルトで、各人が自分にあったプログラムを実施し、国民保険の医療費の削減を行う。

⑪姉妹温泉制度の実施

姉妹都市同様に、姉妹温泉制度を作る。相互で割引のサービスを提供する。湯治／保養ツアーを実施し、ロングステイプランも行う。

⑫情報発信

情報発信をすべきだが、それを出来ない温泉地や温泉旅館がある。これに対して、我々が積極的に関与して、情報を発信する。

⑬温泉地からの情報発信

旅行会社からの情報発信だけでなく、温泉地サイドの情報発信が大切である。HPなどの活用。

⑭大切な小規模旅館

城崎、黒川のように小規模旅館を主体とした共存共栄の精神が大切である。大型旅館による囲い込みは温泉地の衰退を招いている。

⑮温泉 + α

滞在目的を明確にする必要がある。健康志向、歴史探訪、地産地消の料理など、温泉 + α が大切。

(3) 意見の整理

第5回講座は、受講生が69人と多く、様々な意見が寄せられた。おおよその傾向は、活性化に名案はないが、他力本願ではなく、温泉地サイドの努力が必要だということであろう。その努力の仕方には色々あるが、地域共同体としての自覚、共存共栄の精神、温泉 + α の活用、情報発信、そして、温泉愛好者サイドの情報発信などである。

(4) 今後、講座に必要な科目

「正しい温泉の理解と温泉地の活性化」が本講座の目的だが、本講座のあり方に一部の方が、そのあり方について問題点を投げかけた。本講座は、温泉マニア向けではなく、温泉観光実践士の養成講座で、温泉旅館や温泉地の活性化を担う人材の養成である。これをまず確認したい。

以下、希望された科目の一覧である。

「自然科学的な観点からの温泉保護について」「温泉と郷土料理」「温泉の正しい入浴方法」「温泉の入り方や楽しみ方」「旅館再生企業について」「日帰り系温泉の活性化」「人材育成」「海外の事例研究」「観光政策の評価」「活性化の事例紹介」「温泉の魅力」「混浴の歴史」「男女の温泉の違い」「温泉地とインバウンド」「温泉の医学的見地」「温泉地の振興事例」「温泉の法律」「世界の温泉」「温泉施設の設備メンテナンス」「ぜひ行くべく温泉、珍しい温泉」「温泉と経済」「外国の温泉文化」「温泉と地熱発電」「1つの温泉地に限定した過去・現在・未来の取り組み」「温泉の地学的な見方」「温泉施設の経営」などである。

その他には、実際の温泉地での課外授業の導入、講師による体験談、外国の温泉地への視察旅行などが提案された。

色んな意見を頂いたが、今後の対応策として科目の整理は可能と思われる。しかし、自然系の科目、そして入浴の仕方などについては、本講座の時間的な制約もあって、開講は難しい。ただし、「温泉旅館の経営」を「温泉施設の経営」にするなど、一部講座の入れ替えは可能である。そして、受講生から希望を募り、講義可能なテーマを頂き、特別講座の開講を将来的には予定している。

5. おわりに

以上、温泉観光実践士養成講座の実態と意義について、観光地理学の立場で、その概要を明らかにした。その結果、次のことが指摘できよう。

①「温泉の正しい理解と温泉地の活性化」が本講座の目標であり、これに沿って、講座科目がリストアップされ、それに相応しい講師陣が担当している。

②講座の講師は、大阪観光大学観光学研究所の研究者もしくは客員研究員であり、講座講師として一定のレベルは超えている。温泉地に関する研究業績や他の講座講師の経験も豊富で、講座として合格点がつく内容と言えよう。

③講座の目標にしたがって、人文科学・社会科学の講座を主体とし、これを自然科学が支えている。法律系、工学系、入浴系、健康系の科目はないが、これは本講座が「温泉の正しい理解と温泉地の活性化」を標榜しており、足りない科目については、別の講座を紹介している。

④受講生は、大阪観光大学界隈の住民や大阪観光大学の学生、大阪観光大学観光学研究所の客員研究員、別府八湯温泉道の名人関係者が中心であった。しかし、回を重ねるにしたがって、温泉ソムリエのメンバーが増加し、北は東北、南は九州というように、受講生は全国に拡大しつつある。

⑤受講者による温泉旅館や温泉地の活性化に関する意見として、活性化に名案はないが、他力本願ではなく、温泉地サイドの努力が必要だという意見に集約された。その努力の仕方には色々あるが、地域共同体としての自覚、共存共栄の精神、温泉 + α の活用、情報発信、そして、温泉愛好者サイドによる情報発信などがある。

⑥受講生の今後希望する科目として、色々挙げられた。本講座は人文系・社会系の講座を意図しており、自

然系の講座の拡大は困難である。ただし、「温泉施設の経営」の開講は可能と思われる。その他では、受講生が自分の得意な分野での講座を担当する「特別講座」の開講も可能となろう。

⑦温泉旅館や温泉地の活性化に対して、筆者は、日頃からハード・ソフトはどこの温泉地でも同じだが、ハード（精神）やアイデアは微妙に異なると主張している。地産地消、スローツーリズム、ロングステイなどが活性化のキーワードとなるに違いない。

⑧今後の課題は、温泉観光実践士養成講座を継続することである。大体の講座は3回で終了すると言われているが、継続してこそ講座開講の意義がある。そのためには、講座講師は研修を積み重ね、常に新しい情報を的確に教授することが必要である。また、大学における講座の開催は、大学の地域連携や社会貢献の一貫であり、その開催の意義は深い。

⑨今後の方向性は、養成講座を通して、温泉観光実践士、温泉観光管理士、温泉観光診断士を養成することで、人材（財産としての人材）の育成を継続的に行うことである。受講生全員が1つでも多くの温泉地訪問を実践してこそ、この講座の存在価値が高まると思われる。

⑩温泉観光実践士養成講座は、講座講師の存在、受講生、それを支える現場スタッフの存在があってこそ開催されるのである。講座を機会にして、講師は研鑽を重ね、最新の話題を提供するように努力している。受講生は、温泉ソムリエの受講もあって、今後、増加傾向にある。

⑪ところで、講座は2日間にわたって開催されるが、初日の夜は、講師を含めての懇親会（犬鳴山温泉・み奈美亭）が開催されている。懇親会参加者も増えており、席上、温泉をキーワードとした異業種交流が行われている。まさに「観光と交流」であり、温泉観光実践士養成講座開講の意義は深いと思われる。

【謝辞】

本稿の作成に当たり、受講生の皆さんから貴重な意見を頂きました。ここに記して謝意を表します。

【付記】

本研究は、日本温泉地域学会第22回研究発表大会（2013年11月18日）で、口頭発表した内容を修正・加筆したものである。

【資料】

開催要項（一部抜粋）

1. 開催場所

大阪観光大学：〒590-0493

大阪府泉南郡熊取町大久保南 5-3-1

2. 受講定員

受講定員は、原則ありませんが、宿泊施設の定員の都合上、宿泊を希望する受講生は先着50人とします。

3. 受講料

受講料は1科目500円、資料代1,000円。9科目受講（資料代込み）の場合は5,000円とします。1日目終了の際、み奈美亭（泉佐野市犬鳴山温泉）で宿泊懇親会を実施します。その際は、宿泊費は別途1万2,750円（1泊2食（1部屋4人。夕食時ビール・ソフトドリンク付。消費税・入湯税込み）となります。日帰りで受講し、み奈美亭で宿泊しないで、懇親会に参加する場合は、夕食懇親会費7,350円（夕食時ビール・ソフトドリンク付。消費税込み）を別途徴収致します。また、両日共、昼食が必要な方には、1,000円/1日でご用意いたします。

4. 申込方法

郵便局から下記の口座に振込後、「受講申込書」を郵送、FAX または e-mail にてお送り下さい。

振込先：口座番号〔00950-1-191662〕

加入者名〔大阪観光大学〕

振込人住所氏名〔住所・氏名・電話番号〕（郵便局備え付けの振込用紙で振り込んで下さい）

振込期限：（宿泊の場合）平成25年6月12日（水）

（日帰りの場合）平成25年6月19日（水）

申込書送付先：〒590-0493 大阪府泉南郡熊取町大久保南

5-3-1 大阪観光大学「温泉観光実践士」

Tel 072-453-8222 Fax 072-453-1451

e-mail kouza@tourism.ac.jp

※「領収書」につきましては、振込金受領証をもってかえさせていただきます。一旦振り込まれた料金の払い戻しは、原則出来ませんので、ご留意下さい。

【参考文献】

浦達雄（2008）「別府八湯温泉道の意義」温泉地域研究・第11号、13～20頁。

浦達雄（2011）「別府八湯検定試験の意義」観光研究論集（大阪観光大学観光学研究所）・第10号、1～13頁。

温泉観光実践士養成講座実行委員会（2009）『温泉の正しい理解と温泉地の活性化』大阪観光大学観光学研究所、103頁。

温泉観光実践士養成講座実行委員会（2011）『温泉の正しい理解と温泉地の活性化－改訂版－』大阪観光大学観光学研究所、115頁。

温泉観光実践士養成講座実行委員会（2012）『温泉の正しい理解と温泉地の活性化－第3改訂版－』大阪観光大学観光学研究所、124頁。

温泉観光実践士養成講座実行委員会（2013）『温泉の正しい理解と温泉地の活性化－第4改訂版－』大阪観光大学観光学研究所、112頁。